

平成27年6月23日

学位(博士・言語教育学)申請論文 審査報告書

〈学位申請者〉 氏名 孫 逸珊 学生番号 2D502

〈論文題名〉 格助詞「を」のコア・イメージとその用法の構造
— 三つの基本用法を中心に —

〈 審査委員 〉

主査 外国語学部教授

石川 守



副査 外国語学部教授

木村 政康



副査 外国語学部教授

阿久津 智



I. 論文の主旨

本論文は、日本語初級学習者にとって、学習困難な文法項目の一つである格助詞「を」を取り上げ、様々な用例から新たにその用法を独自の観点から明らかにし、そのコア・イメージを抽出し、日本語学習者のための「を」格習得の一助となることを目指している。

格助詞「を」は、一見単純そうに見えるが、その実多様な用法を持っており、最も多い『明鏡国語辞典 第一版』では合計20種に分けられている。『新明解国語辞典第六版』では格助詞の用法は5種に分けられている。『岩波国語辞典第7版』では5種、『大辞林』では8種、『学研国語大辞典第二版』では合計8種に分けられている。また、『学研現代新国語辞典改訂第四版』では、合計17種に分けられている。『角川国語大辞典』では4種、『日本語大辞典第二版』では7種に分けられている。さらに先行研究を見ると、『動詞の意味的文法研究』(1989)では他動詞における「を」格は13種、自動詞における「を」格は9種に分けられている。このように「を」格に関する分類は多いが、その分類の仕方も関連性もあまり的確なものとは言えない。

例えば、「を」格の用法はいくつにも分類されているが、先行研究では、特にその中の一つである「対象」という用法についての分類が非常に多く、また、説明も曖昧でわかりにくい。例えば、『明鏡国語辞典』では、「対象」の用法だけでも14種にも分けられている。『動詞の意味的文法研究』では、ヲ格を取る自動詞の用法と他動詞の用法の二つに大きく分類されており、そのうち自動詞の用法は8種に分けられ、他動詞は12種にも分けられている。また、「目的」と「対象」とを分けてはいるが、その区別もはっきりしない。『明鏡国語辞典』では、「働きかけを受ける物事を対象として示す(対象目的語)」例「石を投げる」としている。すなわち、対象であるが、しかし、「《下に生産や発生を表す動詞を伴って》動作・作用の及ぼされた後の物事(=生産物や変化の結果)を対象として示す(結果目的語)」とし、例として、「家を建てる」を挙げている。しかし、「家」は働きかけを受ける物事ではなく、その行為の結果、最終的に実現されるものであり、言い換えれば、実現目的なのであり、「目的」という別の分類を立てるべきであろう。このように分類は多いにもかかわらず、「を」格の前にどのような名詞が来るかなど重要と思われる分類が成されていないことも多いと指摘している。

本論文では、格助詞「を」の用法を改めて根本的に分析するために、「格助詞『を』の基本用法」について国立国語研究所の調査『現代雑誌九十種の用語用字 第一冊総記・語彙』(1962)から全動詞を抽出し、さらに、『日本語基本動詞用法辞典』(1989)に出ている動詞を加え、1168語からなる動詞の一覧表を独自に作成し、それを基に、先行研究を参考にしながら、一つ一つ「を」格を中心に様々な格助詞と結びつけながら、分析を行っている。そして、新たに他動詞の「を」格の用法として「多方向、全方向からの直接対象」、移動の他動詞にかかわる「移動対象」「再帰的移動対象」、実現目的における「所有権の実現」「目標・方向・到達」などの用法を抽出している。そして、格助詞「を」の複雑な構造を明らかにし、各用法のコア・イメージを抽出している。

さらに、筆者は、その修士論文「移動動詞と格助詞「を」「から」の意味構造に関する研究」(孫逸珊、2011)で、出発点の「を」と「から」の違いについて焦点を絞り、研究を行っている。格助詞の「を」と「から」は「東京駅を出発する」と「東京駅から出発する」のように両者ともに使えるが、この出発点の「を」と「から」の違いを様々な用例から分析している。その結果、前者が出発後の移動(進む)というイメージを含むのに対して、「から」には、そのようなイメージはなく、出発点の選択、あるいは限定という機能を持つものであるという結論を得た。この研究を発展させ、日本語の格助詞「を」と「から」についてさらに研究を進め、本論文においては同時に動詞「出る」、「落ちる」、「降りる」を選択し、説得力のある結論を導き出している。

本論文では、以上の成果を踏まえ、「を」格の様々な用法のコア・イメージを抽出し、このコア・イメージと「を」格の様々な用法との全体的な構造を明らかにし、最終的に「を」格全体の基本的なコア・イメージを示し、日本語学習者の「を」格の用法の理解と習得の一助となることを目指している。

II. 論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

1. 序論

1-1 研究動機 1

1-2 研究方法 2

1-3 本研究の構成 2

2. 格助詞「を」の先行研究

2-1 格助詞についての諸説と定義 3

2-2 辞書、参考書等における格助詞「を」の用法の分類 7

2-2-1 辞書における「を」の用法の分類 7

2-2-2 参考書等における格助詞「を」の用法の分類

2-2-3 辞書・参考書における格助詞「を」の用法の分類の問題点

2-3 「を」格における表層格と深層格の関係とコア・イメージ 30

2-4 森山新『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得』から見た「を」格の
用法 31

3. 格助詞「を」の基本用法

3-1 はじめに	32
3-2 対象	32
3-2-1 直接的な対象	
3-2-2 一方向・多方向（全方向）	
3-2-3 移動対象・再帰的移動対象	
3-2-4 認知（知覚）・思考・感情の対象	
3-2-4-1 認知（知覚）の対象	
3-2-4-2 思考の対象	
3-2-4-3 感情の対象	
3-2-4-4 まとめ	
3-3 実現目的・目標	46
3-3-1 実現目的・完成物・所有権	
3-3-2 目標・方向・到達	
3-4 出発・移動・通過	48
3-4-1 出発点を表す「を」格「から」格と移動動詞「出る」について	48
3-4-1-1 先行研究	
3-4-1-2 辞書における「出る」の分類	
3-4-1-3 先行研究の問題点	
3-4-1-4 「を」格、「から」格と移動動詞「出る」の構文分析	
3-4-1-5 「出る」に関するまとめ	
3-4-2 出発点を表す「を」格「から」格と移動動詞「落ちる」について	74
3-4-2-1 先行研究における「落ちる」の定義と構文	
3-4-2-2 辞書における「落ちる」の分類	
3-4-2-3 「落ちる」の定義と「を」格、「から」格に関する辞書の問題点	
3-4-2-4 「を」格、「から」格と移動動詞「落ちる」の構文分析	
3-4-2-5 「落ちる」に関するまとめ	
3-4-3 出発点を表す「を」格「から」格と移動動詞「おりる」について	87
3-4-3-1 先行研究における「おりる」の定義と構文	
3-4-3-2 辞書における「おりる」の分類	

3-4-3-3 先行研究における問題点

3-4-3-4 移動動詞「おりる」と「を」格「から」格の構文分析

3-4-3-5 「おりる」に関するまとめ

3-4-4 「を」格と「から」格のまとめ

4. 結論 104

4-1 今後の課題

127

参考文献

Ⅲ. 本論文の概要

1. 序論

序論においては、まず「研究動機」について述べられている。「研究動機」については、日本語初級学習者にとって、学習困難な文法項目の一つとして助詞が挙げられるとし、その一つとして、格助詞「を」があると述べている。この格助詞「を」は、一見単純そうに見えるが、その実は様々な用法を持っており、辞書や参考書等で4種から20種まで分類されている。しかも、このような分類は各辞書で統一性がなく、また、関連性もあまりないということを指摘している。これらを整理、分析し、学習者の格助詞「を」の習得の一助としたいと述べている。

また、用法に関しては、従来、他動詞の用法としては簡単に「対象」とし、あまり分析されてこなかったが、実際の分析から、一見単純に見える格助詞「を」の用法が複雑なものであるということを指摘し、新たな分類を立てる必要があると述べている。また、分類の方法も「を」格の前にどのような名詞が来るかなどあまり重要と思われない分類が成されていることも多いと指摘し、動詞一覧表を作成し、動詞との関係から用法を新たに分析すると述べている。

さらに、格助詞「を」の使い方の中で、出発点を表す場合には「を」格も「から」格も使われるが、この問題は、従来「を」格をめぐる問題の中で最大の問題であるが、筆者は修士論文「移動動詞と格助詞「を」「から」の意味構造に関する研究」(孫逸珊、2011)でも、この出発点の「を」と「から」の違いについて焦点を絞り、研究を行っている。格助詞の「を」と「から」は「東京駅を出発する」と「東京駅から出発する」のように両者ともに使えるが、この出発点の「を」と「から」の違いを様々な用例から分析している。その結果、前者が出発後の移動(進む)というイメージを含むのに対して、「から」には、そのようなイメージはなく、出発点の選択、あるいは限定という機能を持つものであるという結論を得た。この研究を発展させ、日本語の格助詞「を」と「から」についてさらに本

論文においては同時に動詞「出る」、「落ちる」、「降りる」を選択し、考察を進め、その違いを明らかにしたいと述べている。

本論文では、以上の結果を踏まえ、「を」格の様々な用法を動詞から分析し、格助詞「を」の全体的な構造を明らかにし、さらに各用法のコア・イメージを抽出し、最終的に「を」格全体の基本的なコア・イメージを明らかにし、日本語学習者の「を」格の用法の理解と習得の一助となることを目指している。

「研究方法」

研究方法としては、まず「を」格の用法に関する先行研究を分析し、さらに「格助詞『を』の基本用法」について国立国語研究所の調査『現代雑誌九十種の用語用字 第一冊総記・語彙』(1962)から全動詞を抽出し、さらに、『日本語基本動詞用法辞典』(1989)に出ている動詞を加え、1168語からなる動詞の一覧表を作成し、国立国語研究所と文部科学省科学研究費特定領域研究が共同開発した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』や検索ソフトを利用し検証を行い、それを基に先行研究を参考にし、一つ一つ「を」格を中心に様々な格助詞と結びつけながら分析を行っている。その分析を踏まえ、各用法のコア・イメージを抽出する。最終的に格助詞「を」の全体的なコア・イメージを抽出し、個々の用法のコア・イメージと結び付け、学習者の格助詞「を」に対する理解を深め、学習の一助としたいと述べている。

第2章 格助詞「を」の先行研究

第2章においては、格助詞「を」を分析するに当たって「格助詞」に関する研究書から格助詞とは何かについてまず検討している。さらに、それを踏まえ、格助詞「を」の用法について各辞書、参考書、論文等の分析を行っている。

2-1の「格助詞についての諸説と定義」では格助詞とは何かについて、大槻文彦の『広日本文典』(1897)、山田孝雄の『日本口語法講義』(1922)、橋本進吉『国語法要説』(1934)、時枝誠記『日本語文法口語篇』(1950)について分析している。さらに、辞書における格助詞の定義について『大辞林』(1995)『国語大辞典 第二版』(1995)『大辞泉』(1998)『日本語学辞典』(1998)を用い、格助詞の定義について、分析を行っている。その結果、格助詞とは「名詞につき、その名詞が文中の述部に対してどのような関係を持っているのか」ということを表すものであるという結論を導き出している。

2-2においては、格助詞「を」の用法の分類について『明鏡 国語辞典 第一版』、『新明解国語辞典第六版』、『岩波国語辞典第7版』、『大辞林』、『学研国語大辞典第二版』、『角川 国語大辞典』、『日本語大辞典 第二版』、『学研現代新国語辞典 改訂第四版』などの代表的な辞書を取り上げ、分類を行っている。また、参考書などでは格助詞「を」の用法

については、一般的に簡略に述べたものが多いが、その中で、詳しく述べている『基礎日本語 2(1980)』、『動詞の意味的文法研究(1940)』、『文法の基礎知識とその教え方(1991)』の3冊を取り上げ、その用法について分類し、分析を行い、各辞書の用法と参考書の用法をまとめ、表にしている。

2-3 では、森山新の『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得』では、認知言語学から見た「を」格の用法について分析している。

森山は「を」格の用法を以下の4つの用法に分類している。

- ① 対格：「子供を殴る」「家を建てる」「本を貸す」「母を恋しがる」
- ② 場所：a.起点：「駅を出る」「故郷を去る」「大学を卒業する」
b.経路：「道を渡る」「駅を通過する」「空を飛ぶ」
- ③ 状況：「太郎が雨の中を行く」「豪雨の中を敵と戦った」
- ④ 時：「思春期を経て大人になる」「4年間を仙台で過ごした」

森山はこれを基に、ヲ格のプロトタイプを①「対格」であるとし、②「場所」、③「状況」、④「時」の用法は、それらの拡張としている。そして、この「対格」の用法の特徴づけとして、「被動作主(PAT)などプロファイルされた動力連鎖や非対象的關係における末尾(tail)の参与者を表す」と、ラネカーの説を踏襲し「視点領域/対峙領域」という用語を用いて、「を」格を表すものを「被動作主など、視点領域の受動的参与者」として、また、際立ちの面から「第二の際立ちが与えられた参与者(lm)」を表すとし、「を」格のプロトタイプとして「対格(被動作主、第二の際立ちが与えられた視点領域の参与者(lm))」を挙げている。そして、「を」のプロトタイプは「対格」の用法であり、そこから「場所」、「状況」、「時」が拡張されると、森山の「を」格の認知言語学から見た分析をまとめている。ただ、問題としては、「対格」の実際の用法の分析が他の研究と同様に簡略であり、その複雑な用法については分析していない。また、日本人にも難しいこの説明を日本語教育の現場で一般の学習者に対してどのように教えるのかという問題を言語教育学の立場から述べている。

第3章「格助詞『を』の基本用法」

3-1 では、格助詞『を』の基本用法を抽出するために、国立国語研究所の調査『現代雑誌九十種の用語用字 第一冊総記・語彙』(1962)から全動詞を取り出し、さらに、『日本語基本動詞用法辞典』(1989)に出ている動詞を加え、1168語からなる動詞の一覧表を作成している。それを基に先行研究を参考しながら、格助詞「を」様々な格助詞と結びつけながら、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所と文部科学省科学研究費特定領域研究が共同開発した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』と検索ソフトを利用し

分析を行っている。その分析の結果として中から特徴的なものだけを取り上げ、格助詞「を」に関し、他動詞に関して「対象」、移動の自動詞として「目的」、「場所」という三つの大きな基本用法を抽出している。

3・2 では、まず「を」格の最も基本的と考えられる「対象」という用法を取り上げ、「動詞一覧表」の調査結果から、それらをさらに、①「直接的な対象」、②「移動対象」、③「認知（知覚）・思考・感情の対象」の三つに大きく分類している。①の「直接的な対象」を「一方向からの対象」（例「ベビーカーを押す」）と「多方向（全方向）からの対象」（例「犯人をみんなで囲む」、「車をカバーで覆う」）の二つに分けている。さらに、②の「移動対象」を「移動対象」（例「花に水をかける」）と「再帰的移動対象」（例「シャワーを浴びる」）の二つに分け、各用法のコア・イメージを抽出している。そして、次のような「直接的な対象」と「一方向・多方向（全方向）」のコア・イメージを示している。

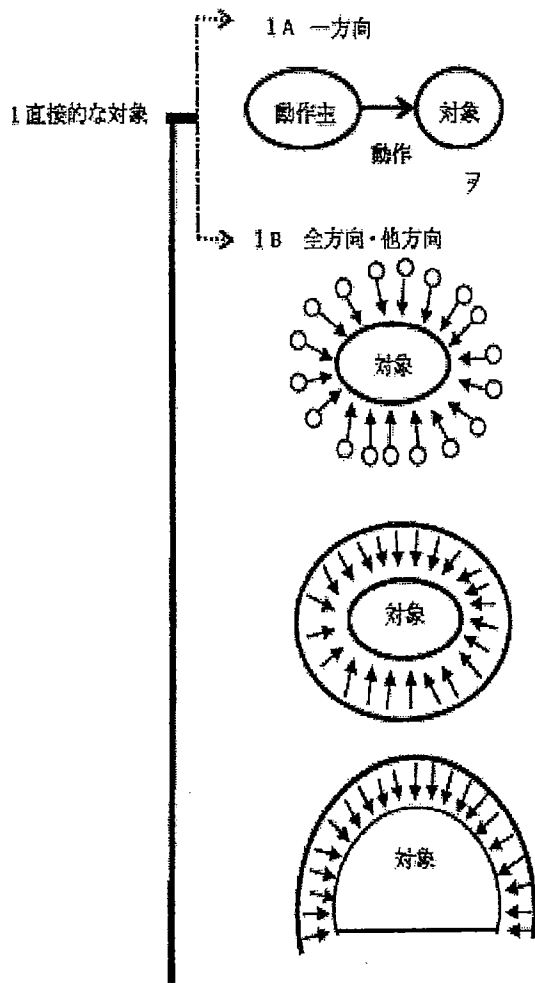


図6 一方向・全方向から

次に「移動対象」と「再帰的移動対象」を分析し、コア・イメージを示している。

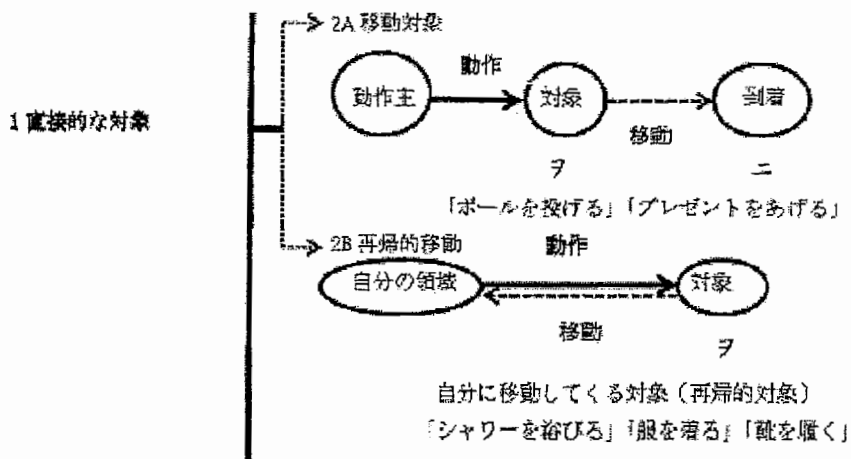


図8 移動対象・再帰的移動

③の次のような「認知（知覚）・思考・感情の対象」について分析し次のコア・イメージを示す。

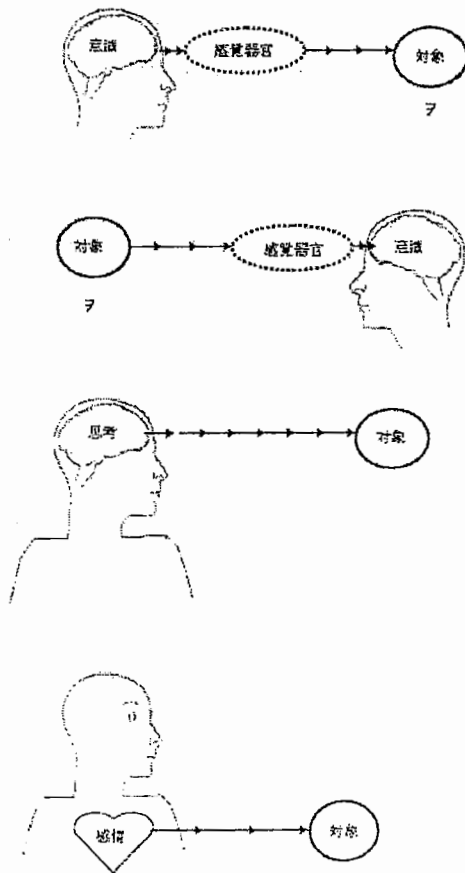


図11 対象のまとめ

3-3 では、「目的」を取り上げ、調査結果から「実現目的」「目標」に分け、さらに「実現目的」を「完成物・所有権」、「目標」を「方向・到達」に分け考察している。この「実現目的」の「完成物」という用法は、上に述べた「直接的対象」が「木を切る」や「肉をこねる」などが「動作を直接加えるところのもの」であるのに対して、「家を建てる」や「ハンバーグを作る」などの「を」格の示すものは、直接動作を加えるものではなく、「様々な動作や行為の結果、最後に完成、実現させるもの」という点で異なっている。「実現目的」の「所有権」は、「家を買う」や「電話を替わる」、「トップの座を争う」などであり、詳しく分析し「所有権の実現」というコアを抽出している。「目標」は「医者を目指す」や「母親の後を追いかける」など「進んでいく先にあるもの」を表し、必ずしも実現や到達の必要はない。

以下に実現目的のコア・イメージを示す。

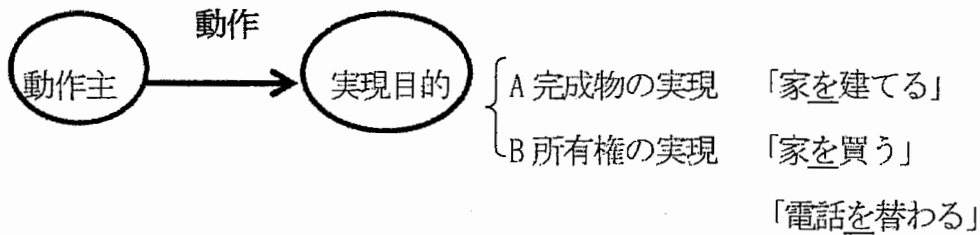


図12 実現目的・完成物・所有権

次に、「トップの座を争う／狙う／競う」のコア・イメージを示す。

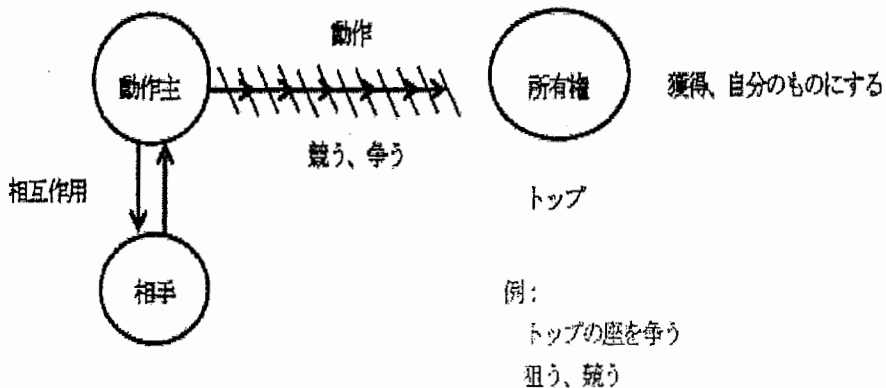


図13 「所有権」

次に「目標」のコア・イメージを示す。

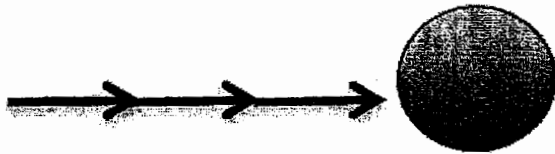


図14 「目標」

この「目標」の特徴は、到着や達成などの実現を必要とせず、近づくだけでよいということである。

以上のように他動詞の「を」格の用法のコアは「何かに向かって進むところのそのものを表していると言えよう。

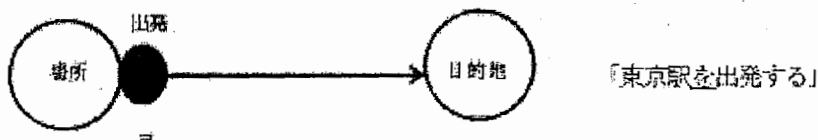
この他動詞のコア・イメージを示せば、以下のようになるだろう。



3-4 においては、他動詞ではなく、「移動の自動詞」と「を」格の用法について分析している。まず「場所」格の「を」を取り上げ、それらを「出発・移動・通過」の三つの動詞の категорияに分け、「場所」に関する「を」格の用法について論じている。その結果、以下のコア・イメージを得ている。

「出発性の自動詞」 出発する、出る、離れる、出港するなど 「を」格 → 「出発点」

出発



「移動性の自動詞」 走る、歩く、進む、飛ぶなど 「を」格 → 「移動の場所」

移動



「通過性の自動詞」 通過する、通る、抜けるなど 「を」格 → 「通過点」

通過

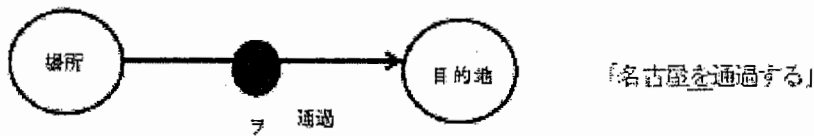


図15 場所 (移動・通過・出発)

次に、従来格助詞「を」の用法で最も大きな問題となっている出発、離脱、起点の用法に関する格助詞「から」との問題について詳細に論じている。

3-4-1 においては、移動性の自動詞、特に出発、離脱点に関する「を」格と「から」格の問題についていくつかの動詞を選び、詳細に分析している。

3-4-1-1 から 3-4-1-5 までは、出発点を表す「を」格「から」格と移動動詞「出る」について先行研究を交え、詳細に論じている。

3-4-2-1 から 3-4-2-5 までは、出発点を表す「を」格「から」格と移動動詞「落ちる」について先行研究を踏まえ、詳細に論じている。

3-4-3-1 から 3-4-3-5 までは出発点を表す「を」格「から」格と移動動詞「おりる」について先行研究を踏まえ、詳細に論じている。

3-4-4 「を」格と「から」格のまとめ

以上の分析から、出発・離脱点について「を」格は「どこかを出て、どこかへ向かって進んで行く」というコアを持ち、「から」格に共通するコアは、どこから向かって進んでいくというイメージはなく、「経路や継続性のない起点、あるいは、単なる離脱、出現の場所、また、それら起点の限定、選択、強調、指定」などのコアがあると述べている。この典型的な用例として以下のものをあげている。

「心臓から血が出る」(出血)

「心臓を出た血が心臓に戻る」(血液の循環)

第4章「結論」では、第3章の分析結果をまとめ、取り上げた各用法のコア・イメージを示している。そして、それらに共通する全体的なコア・イメージを抽出し、すべての「を」格の用法を体系化している。

以上が本論文の構成である。

IV. 論文の総合評価

論文提出までの経緯

筆者は、2010年4月から2011年3月まで台湾長栄大学から本学言語教育研究科博士前期課程に交換留学生として在籍し、長栄大学大学院修士課程修了後の2012年4月に言語教育研究科後期課程言語教育学専攻に入学した。修了必要単位10単位はすでに取得済みであり、外国語検定試験にも合格している。論文提出時の業績は、中間発表および『拓殖大学言語教育研究』など論文、口頭発表を含め、計7本となる。

博士論文完成発表会は、2014年12月20日に実施され、論文は2015年3月27日に受理されている。審査委員による論文審査は、2015年6月12日拓殖大学大学院言語教育研究科論文審査基準に基づいて行われ、判定の結果は全員一致で合格であった。最終試験(口述試験)は、2015年6月20日に実施し、審議の結果「合格」と判定した。

1. 研究テーマの適切性・妥当性について

日本語教育で最も基本的とされ、理解も習得も困難な格助詞「を」の用法を分析し、全体像を明らかにしたこと、また多くの用法から複雑な用法を整理し、コア・イメージを抽出し、学習者の学習上の一助としたことは適切で、妥当であると判断する。

2. 先行研究、文献資料、調査などの情報収集の適切性・妥当性について

多くの辞書の用法の記述、日本語学習参考書、先行研究を調査したことは妥当である。特に格助詞「を」の基本用法を抽出するために、国立国語研究所の調査『現代雑誌九十種の用語用字 第一冊総記・語彙』(1962)から全動詞を取り出し、さらに、『日本語基本動詞用法辞典』(1989)に出ている動詞を加え、1168語からなる動詞の一覧表を作成し、分析を行ったことは適切で、妥当である。

3. 研究方法の適切性・妥当性について

多くの先行研究、資料に基づいて研究を進めたことは、適切、妥当であると判断する。また、国立国語研究所の調査『現代雑誌九十種の用語用字 第一冊総記・語彙』（1962）から全動詞を取り出し、さらに、『日本語基本動詞用法辞典』（1989）に出ている動詞を加え、1168語からなる動詞の一覧表を作成し、格助詞「を」と結び付け、その用法を分析し、国立国語研究所と文部科学省科学研究費特定領域研究が共同開発した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』や検索ソフトを利用し検証を行ったことは適切で、妥当である。

また、従来の研究の多くが格助詞「を」とそれが後接する名詞に焦点を置いているのに対して、動詞との関係に焦点を当てて研究を進めたこと、また、他の動詞との関係に注目した研究でも直観的に選択された少数の動詞を用いて研究を行っているのに対し、1168語の動詞を抽出し、一つ一つに当たり分析していることは、適切で、妥当である。また、複雑な用法から直観的に理解可能なコア・イメージ抽出したことは、学習者の格助詞「を」の習得の一助となるであろうことは評価できる。

4. 論旨の妥当性

論文の論旨そのものは妥当であると判断する。

5. 以上の基準を満たしたうえで、全体の構成、言語表現が適正で、「論文」としての体裁が整っていること。

全体の構成など大きな問題はないと判断する。

ただ、細かい日本語の表現に関しては、文法的な間違いや、おそらくワードの問題であろうが、フォント等が一定しないことや表の野線などにおかしなところ、番号や脚注などが飛んでいるところがあるので、論文公開までに訂正することを求めた。

6. 論文の内容が独創性を有し、当該学問分野の研究に幾ばくかの貢献をなすものであり、また、将来高等教育機関で自立した教育者・研究者としてこの分野で活躍していく能力および学識が認められること。

3の「研究方法の適切性・妥当性」で述べように格助詞「を」とそれに前接する名詞のカテゴリー化を行った研究は存在するが、1168語からなる動詞の一覧表を作成し、格助詞「を」と結び付け、その用法を分析したことは、評価に値するものと考えられる。また、その分析の結果明らかになった、他動詞の「を」格の用法として「多方向、全方向からの直接対象」、移動の他動詞にかかわる「移動対象」、「再帰的移動対象」、実現目的における「所有権の実現」、「目標・方向・到達」などの今までにない多数の新たな用法を抽出したこと

は、従来の単純な「対象」一辺倒であった用法にその複雑な構造を明らかにしたということは斯界に一石を投じたものとして評価に値する。また、長い間、懸案になっていた「を出る」と「から 出る」の解釈に一つの答えを出したことは、評価するに値するものと考ええる。また、「を」格の用法のコア・イメージを抽出したことは、学習者の「を」格の学習の一助となるものと考ええる。

学位申請者は、3年近く日本人学習者に対して中国語を教えているが、この点も実践的な言語教育の実践的研究者として大きく評価できる点であると考ええる。

以上のことから当委員会は、孫逸珊氏が帰国後、台湾の日本語教育の場で実践的な研究者、教育者として活躍することを大いに期待するものである。

審査委員会結論

以上述べたことから、本審査委員会は、慎重・厳正な審査の結果、総合的に判断し、委員全員が一致して学位申請者に対し、「博士（言語教育学）」の学位を授与するに値するものと認めた。